

# 花時計

vol. 7



Kawamura Gakuen  
Woman's University  
川村学園女子大学

〒270-1138 千葉県我孫子市下ヶ戸1133番地  
Tel.0471-83-0111(代) Fax.0471-83-0115



Tōru Matsui

## 新しい図書館

コペンハーゲンで国際会議の終わった翌日のことである。市内から空港に向かうバスにようやく間に合って飛び込んだ私が、一つだけ残っていた空席に腰掛けて息を整えていると、突然隣席の人が声を掛けてきた。

「プロフェッサー・マツイ、これからどちらへ？」  
いかにも親しそうな話しぶりにお名前を訊き返すのをためらい、同じ会議におられた方かと頭をめぐらせなら、「オランダにちょっと、それからハイデルベルグに行って、跡はロンドンというつもりですが…？」と相手の顔を覗き込むと、「ではインド省図書館においでになりますね？」と尋ねてきた。これには少々驚いて、

「よくお分かりになりますね。実はあそこにはこの40年近く何度も行って、いい仕事をさせてもらっているんですよ。」と、世話になった何人かの図書館員の想い出など話して、その最後に「そういえばSさんという若い方にも、19世紀始めの珍しい地図のことでずいぶん世話になりました。」と付け加えた。すると、

「いえ、もう若くはありませんよ、私は。」と答えてニコリと顔を崩した。これには私はうろたえてしまった。その時探し出してくれた地図ははっきり眼底に残っていた。会議用机を二つ並べてやっとその上に広げられるほどの石版刷り大地図

図書館長 松井 透

で、しかもそれが何枚もあり、どれにも細字で沢山の情報が書き込んであった。これが今使えないと分かった時の残念さも、とても忘れられはしなかった。だが彼の顔の方はほとんど見ていなかった。だが彼の顔の方はほとんど見ていなかった。見事に記憶から消え失せている。言葉を失っている私の様子に事情を察したらしく、彼はもう一度ニコニコして、「あの時の地図はお気の毒でしたが、ごく最近大きなコピーのとれる設備がやっと入りましたよ。」

これを聞いた瞬間、私はハイデルブルグ訪問をキャンセルした。数日後インド省図書館では彼が待っていて、正規の閲覧手続きも後回しにして、私がお日その時から仕事を始められるように、臨機の対応をしてくれた。

「川村学園女子大にはいい図書館ができましたね！」今年度に入って何度もこの言葉をかけられた。もちろんそれはすばらしいことだ。だが図書館というものは、中に収まっている情報の量と質が大切だ。また何より、それを利用していい仕事をする人たちと、サポートするいいスタッフが、いつもそこにいてこそ本当にいい図書館になる。インド省図書館の歴史は400年に近い。いきなりその真似はできないが、図書館の理想に向かって、一步一步進んで行きたいものだと思う。

注：インド省図書館は最近「大英図書館」に吸収されて新築の大きな建物の中に収まった。考えてみるとこれも新しい図書館だ。

# 新学部《人間文化学部》開設 ―21世紀にむけて―

## 日本文化学科

中村 恭子

### 時代の要請に応える日本文化の担い手を養成

日本文化学科は2000年4月に発足する。21世紀に踏み出す時にのぞんで、なぜ本学に日本文化学科が増設されるのであろうか。

数年前から、世界的に、文化研究の意義と方法をめぐる議論が盛んになってきた。それは文化を無視して大国の覇権主義によって定められた国境が、世界のあちこちで変動し、一方、「民族」という名のとりでも、グローバルな国際交流がもたらす混血の進行による崩壊がせまる現在、文化は人びとのアイデンティティとしての重要性をいっそう強めてきたからにほかならない。

従来の日本文化研究は伝統的な学問の諸分野で行われてきたが、細分化されたあまりに、抜け落ち、顧みられない局面もあった。その反省に立って日本文化学科では総合的に日本文化を研究することをめざしている。言語、文学、歴史、宗教、民俗、美術はもとより、芸道の実技

学習なども盛り込まれているのはそのためである。日本文化を知的に理解するととどまらず、日本文化で培われる感性を養うことが大切である。また、本学が女子大学である利点を生かして、ジェンダー学の基盤に立ち、日本文化を女性の視点から研究しようとしている。

21世紀の日本文化研究はグローバルなコンテキストにおいていとなまれねばならない。真の国際交流は互いの文化的差異を認めあい、それを楽しむ心から生まれるものではないだろうか。私たちは島国にありがちな偏狭性を過去に葬り、日本文化の伝統を体得して、伝統を日々新たにしながら、良識ある世界市民として来たる時代を生きることが期待されている。日本文化学科は外国人留学生を迎え、日本文化研究を通じて、このような時代の要請に応える日本文化の担い手を内外に送り出すことによって、地道な国際交流推進に貢献することをめざしている。

## 観光文化学科

大崎 晃

### 総合的に「観光を学問する」

「観光は人生を豊かにする」。いまや現代人の生活の一部になっている観光の世界で活躍する女性の育成と、新しい学際的応用的観光学科への貢献を観光文化学科は目指す。女子大学での観光学科は全国で2番目、東日本では初めてである。

カリキュラムの中の専門科目は4つの科目群と演習から構成され、観光基礎科目群の観光概論・観光経済学・余暇生活論・コミュニケーション論・景観論・文化財保護論等は観光の背景となる幅広い教養を、観光事業科目群の旅行事業論・交通事業論・宿泊事業論・外食産業論・観光政策論・観光資源論等は観光産業に従事するにあたって現実に役立つ技能を学習する。

以上はいずれの大学にも共通する観光関係学科の必須的科目だが、実際に観光を数倍楽しくするには他にどんな科目を選んだらよいかを考えた。それには観光地や観光客、特に外国の方々とのコミュニケーションが大切である。そこで実用英語科目群の英会話Ⅰ・英会話Ⅱ・ライティング・リーディング・リスニング・時事英語等は伝達とコミュニケーションの手段としての英語能力を身につける。つぎは観光地について幅広い知識をもつ

ことで、地域研究科目群の地域研究（国内）・同（アジア）・同（ヨーロッパ）・同（アメリカ）等はそれぞれ観光地域の地誌・歴史・民俗・政治・経済・文化・観光資源等について学ぶ。

卒業後の進路は多様だが、例えば3つの分野が考えられる。観光専門職分野では旅行会社等で旅行を企画する旅行専門職・ツアーコンダクター・ツアーガイド等がある。そのために旅行地理検定・旅行業英語検定・観光英語検定および一般旅行業務取扱主任資格者・国内同等の国家試験準備のための科目履修が可能だ。観光関係ホスピタリティー産業分野ではホテル等の宿泊事業・外食産業・交通事業等への就業がある。観光企画開発者の分野では自治体等の観光関係セクションの従事者・イベント企画者・NGOを含む観光を通じての地域振興担当者・観光ジャーナリスト等が考えられる。

最後にホテル等のホスピタリティーサービスの実習、観光産業や観光地域関係の産学協同研究等について今後検討したいことを付記しておく。総合的に「観光を学問する」観光文化学科のイメージを多少なりともお伝えできただろうか。

## 生活環境学科

早川 克巳

### 地球規模で考え身近に実践

ヨチヨチ歩きの頃からおカネを握りしめて買い物に行く。年をとって介護というサービスを保険で契約する。私たちは皆、消費者である。消費という買い物行動を通して安全、安心な質の高い生活を実現するにはどうしたらいいか、それを考える。しかも私たちの個人消費、つまり家計は国の経済全体の六割を占めているから、私たちのおカネの使い方が国や世界の経済を左右するといっている。こうした生きた経済社会の実態を学ぶ。

商品やサービスを買って求め、使うことによって、資源やエネルギーが地球上から少なくなっていく。水や空気の汚染、森林や生物種の減少、酸性雨、オゾンホール、地球温暖化、異常気象やダイオキシンなど有害物質の発生なども問題だ。企業の生産活動にも問題はあるかもしれないが、私たちの消費生活が自然環境を破壊し、動植物をいじめている面がありそうだ。しかもそれが世界のあちこちで見られ、お互いにかかわりがある、美しい地球を次の世代にちゃんと手渡すために、私たちは環境問題にまじめに取り組まなくてはならない。

消費生活の中の被害やトラブルを防ぎ、解決し、環境問題に取り組むのに男女の別や市民と企業の違い、国や人種の

違いなどはない。しかし新しい生命をはぐくみ育てる能力を持つ女性にはとりわけ関心の深いテーマだ。また生活の場で考えながら実践する機会の多い女性はより発言したり、提言する機会があつて当然だろう、世界の多くの国々で女性たちは活発に発言し、提言してむしろ男性たちをひっぱって行っている。その意味で男女共同参画が欠かせまい。女性の権利を人権として確立し、生活の質の向上や宇宙船地球号の永遠の航行を実現する道を探すのは、女子大学の大きな役目のように思える。

私たちは恵まれた豊かな生活をエンジョイしていることに感謝の心を忘れたくない。一方で、地球上には貧困や飢餓で悩む人々がいることを忘れず、奉仕の精神を発揮していきたい。それには日常の生活をきちんと送りながら、女性としての自覚を育てていくことが大切と考える。私たちの大学の建学の精神はこんな形で生きて来る。

幸い大学の内外から優秀なスタッフがそろった、Think globally, act locally（地球規模で考え、身近に実践）を合言葉に、教員、学生が一緒になって新しいミレニアム（千年紀）を切り拓いていきたい。



Think globally,  
act locally

## 第11回鶴雅祭を終えて

学園祭実行委員長 社会教育学科4年 内田弥生子

第11回鶴雅祭は、10月23日・24日秋晴れのもと空色のアーチに迎えられた。

今回のテーマは、『Power up〜ひとかわむけろ〜』と題し、19名の実行委員が集結した。しかし、テーマを決めたがどうPower upさせるのかが悩みであった。結果で見ると4つほどPower upされたものがある。

その1) “アーチ”。今までになく、しっかりとっていて、人目を引く作品に仕上がっていた。

その2) “ポスター”。例年は、学生から募集した作品を使用していたが、今年は、11・12号館がオープンしたこともあり、建物をメインとしたポスターに仕上げてみた。ヒントは、この花時計が与えてくれ、No.6と同様の写真なので「アレ？」と思った方も多いと思う。

その3) “パンフレット”。パンフもポスター同様に公募していたが、今回は、シンプルにしてみた。とても好評でカッコイイという声もあった。

その4) “参加型企画”。前回は、ミスコンだったが、今回は、カラオケ大会・スタンプラリー・抽選会などと学生や一般の方々、教職員の方々にも楽しんでいただける企画を増やした。他にもPower

upした点が多かったと思う。

メインイベントとしては、神尾米さんのトークショーとBOOMERのトークライブで盛り上がった。

展示や公演でも日々の成果が発表され、今まで以上に内容の濃いものに仕上がっていた。

実行委員19名のうち、4年6名、3年1名、2年3名、1年9名という構成の中で、ほとんどの委員が企画・イベントに携わるのが初めてということだったが、ここまで仕上げられたPowerは、壮大であった。そして、無事終了した現在、メンバー達も、それぞれにPower upを図ることができたのではないだろうか。私自身が、そうであるように。

短い期間ではあったが、それぞれの場所から委員会に集結し、鶴雅祭を作り上げたこの19名は、深い絆で結ばれたことだろう。そして、3年生以下の13名が次回のメンバーを増やし、より深い絆で結ばれた委員会を結成する土台となっており、今後益々発展していくことを期待している。

最後になったが、第11回鶴雅祭を成功へと導いて下さった全ての皆様にこの場をお借りして、厚く御礼申し上げたい。



▲ゲストのBOOMERのトークライブに盛り上がる



▲ゲストの元プロテニスプレーヤー神尾米さんと学園祭実行委員会スタッフ



## ●グラウンド 新装!!

7月末から9月上旬にかけての夏休み期間中、グラウンドの改修工事が行われた。

新装なったグラウンドは、トラックの部分鮮やかなエンジ色の全天候型である。

9月26日の日曜日には、さっそく川村中学校の体育祭が行われ、爽やかに澄み渡った青空の下、大変な盛況ぶりであった。

この改修工事に伴い、テニスコートが北側に移設され、今まで以上にゆとりのあるコートになるとともに、これまでのテニスコートの跡地は、縦100メートル余・横55メートルの第2グラウンドとして生まれ変わったのである。

ここを利用するタッチフット・ラクロス・ベースボールなど、今後の活躍が大いに期待されている。

## キャンパスから

### 陶芸と心理学

きっかけは母である。母が老人教室に通って陶芸を学ぼうちに「窯が欲しい」と言いだしたことである。素人が遊ぶための小さな窯だろうと思い、二つ返事で「いいよ」と言ったが、窯が運ばれて驚いた。なんとクレーン車で運ばれてきた。というわけで、せっかく窯を買ってしまったので、自分も陶芸を始めることにした。もっとも、昔から陶器は大好きで、いつかは陶芸を始めたいと思っていたので、渡りに船ではあった。

始めてみるとこれが面白い。陶芸という多くの人は轆轤を回したり、絵つけをする姿を思い浮かべるだろうが、陶芸の本当の面白さは「焼き」にある。「焼き」はだいたい1200～1300° くらいで17～8時間かけている。ただ焼けばいいと

心理学科教授 松井 洋

思うかもしれないが、なかなか思いどおりにはならず、意外な変化も多い。加えて、人でも焼き物でも、ちんまりとまとまったものは嫌いなほうなので、ガスや炭やら藁など使って変化を出そうとする。そのため、思いも掛けないすばらしい変化が見られることがあるが、だいたいは悪いほうに変化する。だが、これが面白いのである。

考えてみると、心理学と陶芸は似たところがある。人の行動を予測しようとするのだが、人の心は微妙に、そして思わぬ変化を見せる。だから心理学は面白い。どちらも、懸命の努力の結果、かなりわかった気になったところで裏切られる。思うままにならないという、陶芸と心理学には共通する面白さがある。



思うようにならないことばかりだが、私の作品をうまくおだててもちあげてくれる心温かい友人にささえられ、今日も懲りずに粘土を捏ねているのである。

### 英語スピーチコンテスト

一般教育課程教授 谷林眞理子

鶴雅祭にスピーチコンテストを開催するようになって、今年で4年目となる。このコンテストはESSと英語英文学科の共同主催、川村英文学会の協賛で行われているが、実際には企画から準備、出場者の募集、当日の司会進行に至るまでESSの部員が中心になって行い、英語英文学科はお手伝いするだけである。

例年後期に入ると出場者も出揃い、放課後を利用してネイティブの先生方に原稿を見ていただき、発表の準備をする。今年はポーシャ先生の他に新任のロービク先生が加わって指導して下さった。Eメールのやり取りで英語を直していただき、その次には先生の前で実際に声に出して発表してみるといった練習がコンテスト前日まで続いた。出場者はネイテ

ィブの先生以外にも英語英文学科の先生をつかまえては、さらに英語を磨いたり、発表の練習をした。

鶴雅祭初日の10月23日、3号館は観客でほぼ埋まり、9人の出場者は緊張して開会を待つ。史学科2年の大森春美さんのさわやかな司会によりコンテストが始まった。アメリカ、カナダ、フランスなどのホームステイ先でのさまざまな体験から、日本社会では男性も子供が産めて家事に参加すれば男女不平等がなくなるといった画期的な発言まで、熱のこもった発表が続いた。3人の審査員、ポーシャ、ロービク、菱田先生の厳正な審査の結果、1位はタイムマシンによって世界を変えてはならないと断言した英文3年の高澤真理さん、2位は外国人に自分

の意見を伝えることの難しさを話した英文3年の鈴木こずえさん、3位は日本人はもっと個性を重んじるべきだと主張した英文1年の山崎真琴さん、学生審査員賞はアメリカの子供達に親しまれているナースリーライムズについて表情豊かに発表した英文4年の横山尚子さんに決まった。どの発表者もしっかりした問題意識をもち、自分の主張を伝えようとする熱意が観客に伝わってきた。審査員も順位を決めるのに苦労したのではないだろうか。

最近は運動部にしても文芸部にしても部活には消極的な傾向がみられる。どこかさめた態度を取る学生が多いなかで、スピーチコンテストという目標に向かって自分の意見を発表することは、それぞれの出場者にとって貴重な体験だったと思う。これまでも本コンテストの入賞者の史学科の杉山みゆきさんや英語英文学科の岡島麻子さんが、千葉商科大学瑞穂杯争奪・全国英語弁論大会で優秀な成績をおさめているが、今後もこのスピーチコンテストから他流試合をしようという人が出てくるとよいと思う。また、今年の出場者は情報教育学科の倉田康江さん以外は全員英語英文学科だったが、他学科からも、それも1・2年次がこのようなコンテストに積極的に参加してほしい。



### ゴルフ部

情報教育学科3年 大和孝子

川村学園女子大学ゴルフ部は、1990年創部で、現在部員は、4年・3年・1年の計13名で活動している。

練習は、週2回で、千葉県柏市にある「美里ゴルフセンター」で、伊能一郎プロ（現シニアのプロゴルファー）の指導を受けている。

土・日や祭日には、キャディーバイトをして、その後そちらでラウンドをさせて頂き、部員の実力を高めるのに役立っている。

また、春休みに2回、夏休みに2回にわたり合宿を行っており、部員同士の親睦を深め、充実した大学生活を送っている。夏合宿は、ゴルフ部の顧問の浅井義弘先生の千葉の別荘をお借りし、楽しく且つ自由な合宿を毎年恒例のように行っている。

昨年から関東学生ゴルフ連盟に加盟、去年の秋季ブロック戦で、FからEブロックに昇格し、今年の春季ブロック戦で、



Dブロックに、さらに秋季ブロック戦では、念願のCブロックに昇格することができた。

これからは、部員一人一人が目標を決め、それに向けて毎日の練習に励み、これまで以上に成長していきたいと思う。また、来年のブロック戦もBブロックを

目指し、今までのように、ぐんぐん昇格していくよう頑張りたいと思っている。

ゴルフ部では、部員募集を行なっている。経験者はもちろん、初心者も大歓迎なので、少しでも興味がある・やってみたい・等々、いつでも部室の方に来てほしい。

### 出版活動

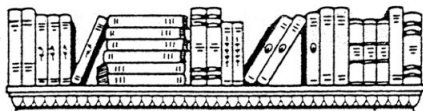
- ブライアン・アトベリー著、谷本誠剛・菱田信彦共訳、『ファンタジー文学入門』（大修館書店 1999年）
- 西川誠 他 宮崎県の歴史（山川出版社 1999年）

### 平成11年度の公開講座について

本年の『我孫子市市民大学開放講座』は各開講日とも向学心旺盛な市内地域の方々が集まり、熱のこもった講座が展開された。

年を重ねるごとに本学の公開講座も地域の生涯学習ニーズを着実につかんで来ているようである。

本年から教室が新図書館（11号館）1階の講義室にかわった。さらに親しみやすい雰囲気になった。



#### テーマ「こころ」再発見

| 開講日       | 演 題                                                          | 専攻・講師名            |
|-----------|--------------------------------------------------------------|-------------------|
| 9月18日（土）  | 「現象学的自我について」                                                 | （学習）<br>田中博正      |
| 9月25日（土）  | 「眼、脳、そしてこころ」                                                 | （生理心理学）<br>田中 裕   |
| 10月2日（土）  | 「こころの汗でストレス解消！<br>—スポーツと心の健康—」                               | （スポーツ心理学）<br>高見和至 |
| 10月9日（土）  | 「1999国際会議【脳と意識】—心と物とを測る」                                     | （心理学）<br>岡本榮一     |
| 10月30日（土） | 「絵ごろの再発見<br>—スパッタリング（霧吹き法）作画する—」                             | （造形教育）<br>荻原延元    |
| 11月6日（土）  | 「ダイアナ・W・ジョーンズとマーガレット・マーヒー<br>のファンタジーにおける女性主人公の“negotiation”」 | （英文学）<br>菱田信彦     |
| 11月13日（土） | 「こころ再発見をヨーロッパ史に見る」                                           | （歴史学）<br>松井 透     |

## 石井陽子 英語英文学科1997年卒

私は現在朝日新聞社、国際本部国際営業部に勤務している。こちらは英字新聞を取り扱うセクションで、私の担当は、主にNew York Times社と日本の顧客とのコーディネート業務、同社と英字新聞販売書店等の経理関連業務、教育機関催事（主に英語でのスピーチコンテスト）の後援・手配業務の3つである。

国際本部のワンフロアには、英字新聞のAsahi Evening News、Asahi Weekly、雑誌Japan Quarterlyの編集、制作、販売、広告と新聞発行の一連の作業が進み、多国籍企業のようなスタッフによって多種多様な仕事処理されていく。実際ネイティブのスタッフが多いセクションなので英語でのビジネスコミュニケーション能力は必須である。と言っても私もまだまだ苦手な分野。毎日が勉強、勉強の連続だ。

また上記の実務に加えて、例えば朝日新聞の英訳文や英文記事の表現法などの問合わせに答えるのも仕事だ。これが意外に多い…。しかし、これは日本語だけでなく英語についても朝日新聞が広く信頼されている証拠。読者に開かれた新聞を提供する者として、今後も出来る限りの対応を心がけ、国境を超えて色々な方々に読んでいただければと思う。

## 町田冬花 史学科1996年卒

大学を卒業して4年がたとうとしているが、私はその間2回転職し、現在は戸田市社会福祉協議会で福祉関係の仕事をしている。前の仕事が半年ほどしか続かなかったのに比べ、今回は2年半ももっている、続いているほうだろう。

今の仕事は、福祉分野の中でも地域社会全体にかかわっている内容も多様で、やりがいはある。しかし仕事量が多くてとにかく時間がない。立ちどまって見直したり考えたりする間もなく「例年どおり」になってしまうことが多いと、これで良いのだろうか悩んでしまう。休みの日までボーッとして明日の仕事の

ことを考えていると、まるで会社人間かと思うこともある。

大学時代は考えを明日に繰り越したり、ゆっくり考え直したりする時間があったり、本当によかった。冬の昼下がりに陽のあたる部屋で好きな本をじっくりと読むことが今では最高のぜいたくになってしまったようである。

## 畑村真紀 心理学科1999年卒

楽しかった学園生活を去り、私は今病院の事務員として働いている。保険証、医療関係、会計入力等の専門知識がないため、早く仕事を覚えねばならないプレッシャーとわからない所を聞く間もない忙しさに戸惑うばかりの毎日である。

受付に至っては、自分の病状を我先に訴えたがっている患者でいっぱい。別の患者と対応している時や他の仕事をしている時でも話しかけてくる。私はついイライラしてしまい、素気ない態度をとってしまいそうになる。

こんな時、相手の気持ちになって耳を傾ける傾聴の心という言葉がいつも思い出す。なぜなら優しい思いやりの気持ちが生まれ、患者の心を和ませる接し方ができるようになるからだ。私がこのような気持ちになれたのは、すべて先生方のおかげである。

今後先生方からの教えを心に刻み、体だけでなく様々な悩みを抱えた人々の心を少しでも癒すことのできる人間になりたいと思う。

## 古沢静香 情報教育学科1999年卒

今年4月、独立系ソフトウェア会社に就職し、SEを目指して仕事をしている。「就職難」が騒がれる中、注目されるコンピュータ業界、さらに格好良い横文字の職業である「SE」。しかし、今の私は、「格好悪い」。その理由は、「毎日迷いながら生活しているから」。

大学2年生終了後、私は1年間イギリスに留学をしたが、それに対して、迷いや恐怖心は皆無だった。留学中には、「本当にやりたい事」を発見することができた。しかし、私はそれに正面から挑戦する事が恐く、それを横目で見ながら毎日の生活を送っている。

自分の「格好悪さ」に気付かされるのは、夢を叶えようと努力し続けている人、または、それを手に入れ、楽しんでいる人との出会いからだと思う。彼らは、今私が一番欲しい、本物の「格好良さ」を持っている。それを手に入れるために、「これでいい。」ではなく、「これがいい。」という決断をしていこうと思う。

## 細井香 社会教育学科1995年卒

私は現在、川村学園女子大学大学院修士課程で、生涯学習学を専攻している。卒業してから5年ぶりの母校である。新築された校舎に驚き、設備に満足し、素晴らしい先生方と仲間と囲まれながらの恵まれた環境での学習である。一度、社会に出てからの大学院生活なので、生活のペースをつかむのに時間を要したが、仕事をしていて、問題意識が明確にもてた事は、自分の自信につながっている。

## 藤間晶子 幼児教育学科1996年卒

立正大学系列の立正幼稚園に就職して早4年を経過し、現在私は5歳児を担当している。自分自身が当園の卒園生で、十数年前の自分の姿を思い浮かべつつ、深い愛着を感じる毎日だ。自然環境にも恵まれ、とにかく物質的なものに目が移る時代にあって、自然の素晴らしさを教育の基本にもてる現状には感謝している。

子どもたちとの生活の中では「先生見て、見て！」と何かが初めて出来た時や友だちと共感しあう、キラキラと輝く瞳にたくさん出会ってきた。その日々の成長はたのしみもあり、自分の未熟さや責任の大きさ・教育の奥深さを改めて感じた。

私にとって、大学生活で学び考えたことや、ラクロスを通して仲間と培ったチームワークや精神は今でも自分のベースになっている。皆さんも夢にむかって、充実した大学生活を送ってほしい。

## 編集後記

- 21世紀にむけて、川村学園女子大学がさらに前進するように努力したい。(F)
- 広報委員になって1年、あっという間に過ぎてしまい、時の経つスピードを実感しています。初めての仕事ゆえ、行き届かない面も多く、他の先生方に助けて頂きました。ありがとうございました。(S)
- 初めて「花時計」の編集作業に参加した。これまでほとんど読まなかったが、それぞれの文字・記事・写真に重要な意味があることを新たに認識した。(A)
- 新研究棟をバックにした紅葉はひととき美しく、学生達にも活気があふれています。人間文化学部の開設が楽しみです。(H)

発行日/平成12年1月20日第7号発行  
制作/川村学園女子大学広報委員会  
ホームページ <http://www.kgwu.ac.jp/>

## 「卒業生は今」 原稿募集のお知らせ

「花時計」は、大学での現在をお伝えるために学内ばかりでなく、卒業生にもお送りさせていただくことになりました。

「卒業生は今」のコーナーでは、卒業生からのひとこと（400字程度）をお待ちしています。卒業年度と学科を必ずお書き添え下さい。採用分には大学のテレホンカードをさしあげます。